あれから310年

㈶中央義士会 会報

創立明治41年　　平成25年12月発行　Ｎｏ65

目　次

・平成25年11月3日　江戸文化歴史検定試験は・・・・・・一
・復帰・中央義士会への思い　亀谷孝子・・・・・・二
・「大石内蔵助書状検証」　理事長　中島康夫・・・・・三
・三百十二年目の現場検証　テレビディレクター　田中慎一・・・・五
・第九回忠臣蔵愛好会　理事　柿崎　輝彦・・・・・八
・「平成堀内組」総会　平成堀内組　頭取　宮川政士・・・・・十
・第11回忠臣蔵博士試験問題・・・・・十一
・業務報告・・・・・十四
・自由広告　・今期新入会員紹介・編集後記・・・・・十五

平成２５年１１月３日　江戸文化歴史検定試験は・・・

ひどい試験である。問題そのものが間違っている。

１級試験　１７問　　（問題の漢字にはルビがふられているが省略）

［１７］大石内蔵助ら赤穂四十六士は、元禄１６年２月４日に切腹します。では、そのときに内蔵助が詠んだと伝えられる辞世の歌は、どれでしょう？
い）あら楽し思ひは晴るる身は捨つる　浮世の月にかかる雲なし
ろ）風さそふ花よりもなほ我はまた　春の名残をいかにとやせん
は）散りぬべき時知りてこそ世の中の　花も花なれ人も人なれ
に）提げる我が得具足の一つ太刀　今この時ぞ天に擲つ

間違いの解説

確かに大石ら４６士は２月４日に切腹しているが、特に彼らが２月４日に詠じた辞世の句などはない。敢えていうなら、大石が２月２日に書状の内に詠んだ「覚悟した程にぬれぬ時雨かな」が最後の歌だろう。

（い）「あら楽し・・・」が正解としているのだろうけれど、この歌は、元禄１５年１２月１５日、大石が泉岳寺へ引き揚げて来た時に歌ったものである。そのことは「易水連袂録」にはっきり示されている。

その上、正解となっている「あら楽し・・・」ではなく「あら楽や・・・」であることも「易水連袂録」に示されている。更に（ろ）に示されている、内匠頭の歌とされている最後の箇所の「とやせん」も「とかせん」である。

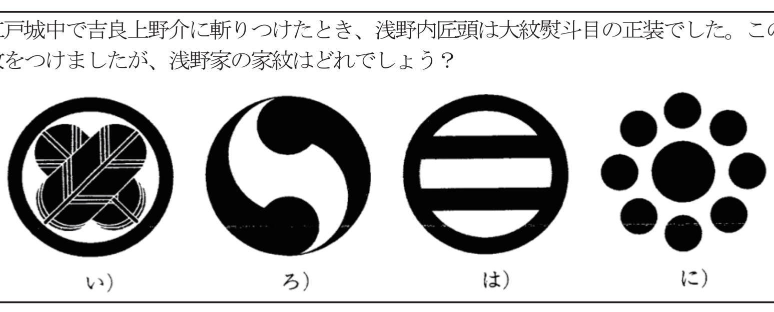
２級試験　６問と１８問　　（問題の漢字にはルビがふられているが省略）

［６］赤穂浪士たちは、吉良上野介の動向や吉良邸の様子をうかがうために、さまざまな努力をしています。では、「浅野内匠頭家来松平隠岐守江御預け一件」に記されている、潮田又之丞が情報収集のために行ったことは、次のうちどれでしょう？
い）吉良家の家老に中間奉公した
ろ）上野介の茶道の師匠に弟子入りした
は）吉良邸の近くに食べ物を売る店を出した
に）吉良邸普請の際の労働者にまぎれこんだ

間違いの解説

結果的に答えは（い）でよいのだが、出題者は（ろ）の文章で薄学を露呈した。大高源五が接した四方庵宗徧を上野介の茶道の師匠と勘違いしている。出題者は解答を惑わすために考えたのだろうが、上野介の茶道の師は、京の千宗旦であり、上野介と宗徧は宗旦の兄弟弟子で同格である。それに、宗旦はこの事件の時は亡くなっている人物である。

［１８］江戸城中で吉良上野介に斬りつけたとき、浅野内匠頭は大紋熨斗目の正装でした。この大紋熨斗目には家紋をつけましたが、浅野家の家紋はどれでしょう？



い）　ろ）　は）　に）

間違いの解説

家紋を並べたまではよいが、赤穂浅野家は違い鷹之羽に、虫食いが加わるのである。こうなると、出題にからんだ大学の先生も問題だが、その実力も見抜かず、依頼した協会側にも問題はある。現在騒いでいる、レストランの素材問題と変わらないではないか。

復帰・中央義士会への思い

亀谷孝子

私は、若い時から忠臣蔵が大好きで、よく東映時代劇を見に行ったものです。

あれから四十年（どこかで聞いたセリフですが）。

泉岳寺の義士祭には毎年足を運んでおりましたが、ある時から中央義士会の方々が本堂の左側にテントを張り相談所を設けるようになり、会員の募集もしておりました。

以前より、中央義士会はドラマや芝居もさることながら、史実を研究している団体だという事は薄々知って居りましたが、忠臣蔵が好きな私は、前後を考えず「ああ、これで勉強ができる」と思い、その場で自ら入会をしました。それは、今から十五年も前のことだと思います。

ただ、入会はしたものの矢張り、私のレベルより少し上の方でした。しかし、入会した以上は、辞める訳にも行かず、私なりに勉強して少しずつですが、史実の醍醐味が分かってきました。

何分、中央義士会は創立が百年も前の会ですから、それなりに歴史があり、日本で忠臣蔵を本格的に研究している唯一の団体です。

理事長も忠臣蔵（元禄事件）には、絶対的自信があるといって居りますが、中々、周りの団体や関係者が理解してくれず困っているともいって居られました。

また、近年世相が少し変わってきたのか、変な一部の作家がはびこり、自分たちの未熟さをさらけ出しているようです。

ＮＨＫ大河ドラマも、戦国か幕末しか放映しなくなり、人心の退廃がさけばれている昨今、ももうそろそろ大河も忠臣蔵を企画してもよいのでは、と思うのは私ばかりでしょうか。

さて、そんな私でも、頑張って頑張って第二回忠臣蔵博士試験に合格したのです。

そして、中央義士会の理事にも就任させていただいておりましたが、拠ん所ない家庭の事情により、十二年程世話になっておりました会を三年ほど離れることになりました。

その間、忠臣蔵のニュースが耳に入ったり、十二月になりますと、急に気持ちが寂しくなり、いたたまれませんでした。

そんな折り、今度会員の方を通じて理事長の呼びかけを請け、再入会することができました。

聞くところによりますと、中央義士会も先を見据えると大変な時期と伺いましたので、非力な私ですが、少しでもお力になればと思っております。

忠臣蔵（元禄事件）こそ、日本人のバイブルだと理事長は常々おっしゃっておりますので、一緒に頑張りたいと思っております。

中央義士会は、職歴・学歴・思想・宗教一切こだわる会でありません。唯々、忠臣蔵が好きな人々の集まる会です。

何らかの事情で一時辞めた人でも温かく迎えてくれます。

私は、一生のテーマに据えて、マイペースで歩んで行きたいと思っております。

大石内蔵助書状検証

理事長　中島康夫

元禄十五年十一月二十九日、この日、大石内蔵助は十二月五日夜半と決まった討入りのため、瑤泉院付用人落合与左衛門へ提出する目録一式と書状を認めていた。

所謂、旧赤穂浅野家引渡の際の帳面と図録と十一月二十九日の書状である。

この内、二十九日付の落合与左衛門へ宛てた書状に、あまり触れている研究者がいないので少々検証してみたいと思う。

この書状の内、追啓の文面中に次の文章が見られる。

「（中略）我々儀去冬御物語申候趣ニ付同志の面々申合京都退出申候、委細之様子ハ追而御承知可被成候、去年以来堅ク申合候者共此節ニ全冷光院御厚恩を忘俄ニ変心申候段近此不届千万無是非儀ニ御座候、則拙者へ先比断申越候者共書付不入儀候得共御慰ニ懸御目候」

これを直訳すると、次のようになる。

「我々は、去年お話申しました考えにより同志の面々、京都を出ました。詳しい様子は、後日お分かりになるでしょう。去年以来堅く約束した者の内、内匠頭の厚恩を忘れ脱盟するとは、不届きであり許されません。いわゆる私に断ってきた者共の去り状を残らず、お目に掛けますので、気晴らしに、ご覧下さい」

右に挙げた文章は、元禄事件解明に頗る大事な文面である。

すなわち、更に文面の細部を挙げて説明するが、

●「我々儀去冬御物語申候趣ニ付同志の面々申合京都退出申候」

右の一文は、元禄事件の研究をも、百八十度転換させるほどの、重要な文章である。

従って、更に、注釈を入れて解釈すると、次のようになる。

「我々志のある者は、去年東下した際に落合様と瑤泉院様にお約束しました通り、大学様が吉良家と対等に江戸城へ登られるようになり、更に、上野介殿にも何らかの処罰が下り、浅野家の面目を晴さなければと思い、精一杯の努力をして参りましたが、大学様への処分は浅野本家への差し置きと決まりました。

元禄十五年七月十八日の幕府の決定により、我々は、上野介を討つため京都を退出し江戸へ終結しました。その詳しいことは後日お知りになるでしょう。内匠頭の厚恩を忘れ脱盟した方の去り状をお目に掛けますので、それもご覧下さい」

と解釈できる。

更に、この文章の中で最重要視されるのは、討入りの一年前、元禄十四年十一月江戸三次浅野家下屋敷で瑤泉院、内蔵助、落合の三人で上野介を討つ密話があったことである。

現在まで、多くの諸書は、内蔵助第一次東下りは、次のような理由を挙げていた。

（一）先ず、江戸急進派の鎮撫
（二）荒木十左衛門らへの謝礼
（三）内匠頭の墓参
（四）浅野家再興への再確認
（五）吉良家の動静
（六）瑤泉院への挨拶

などを理由に挙げていた。

しかし、その他の理由を挙げている諸書は、余り目にしていない。

「元禄十四年十一月の瑤泉院、内蔵助、落合の密談」

この密談は三人揃って、挨拶をした事ぐらいではないのである。

既に、上野介が隠居（同年十二月十一日）する以前に、上野介を討つ約束を瑤泉院に明かしていた事になる。それに使われる六百九十両の承諾をしていたということになり、討入りの結果、女性である瑤泉院にも断罪が及ぶ可能性も予測や覚悟をしていたという事にもなる。

内蔵助は既に、元禄十四年中、つまり一年以上前より上野介を討つ覚悟でいたのである。

内蔵助の妻子たちへの離別一つ伺っても、上野介を討つ覚悟であったことは分かっていたはずである。にも関わらず、安兵衛たちは、やんややんやと責付いていたのである。

また、現代の研究家たちも「密談」があったこ

とを見落としてきたのである。

これでは、内蔵助の命を懸けた行動も「無」になり、一部の作家、評論家たちが主張する「内蔵助は討入る気持ちがなかった」に、同調することになる。

更に、この元禄十五年十一月二十九日の書状は、この日二十九日に、瑤泉院側に渡ったと主張する諸書がほとんどである。

十二月五日の討入りが延引になり、その後十二月九日になり、どうやら十四日の茶会、つまり討入りが決定した段階で、内蔵助は早十二月九日付で「討入り成功報告書」を書いていたのである。

そして、十一月二十九日の書状と赤穂浅野家の精算目録十六品と共に、十二月十三日に、改めて近松勘六の家僕甚三郎に運ばせたことは、既に、三五館発刊「大石内蔵助・最後の密使」で発表済みである。

帳面書付之目録（略）

一 御用金之帳　袋ニ入弐冊
　 御金御米支配帳
一 総帳　袋ニ入拾冊
　 金銀請取元帳
　 引料金帳
　 払物代聚以後金渡帳
一 右帳面之小手形共　袋ニ入有
　 大学様御金之書付　一通
一 但三通ヲ継立候分　一封
　 武具帳　一通
　 此二品本紙は井上団右衛門江遣也
一 絵図　三袋　員五枚
　 城之図并侍屋鋪町割之図
　 城曲輪之図
　 赤穂・佐用・加東・加西郡之図
一 覚書　袋ニ入四冊
一 赤穂四ヵ寺江寄附之書付　一包
一 高野山悉地院より来日牌証文箱入
一 紫野瑞光院附候山証文并寄附帳箱入り
一 分限帳　一冊
一 正保二年御引渡帳　箱入三冊
　 赤穂城内改寄帳
一 本丸・二ノ丸建家改帳　袋ニ入四冊
　 城附武具帳
一 女証文願書　箱入
一 御由緒書　箱入一冊
一 預り置き候金銀請払帳　一冊
一 右之小手形共　袋ニ入
　 〆十六品

右之品々取聚指出申所如件

元禄十五年午十一月　大石内蔵助　㊞

落合与左衛門殿

これらの証明は「江赤見聞記」や「落合与左衛門覚書」で証明済みである。

あくまで二十九日説を主張される方は、二十九日に落合方に渡った証明をしてほしい。更に、誰が運んだのかも明記してほしい。

やがて討入りが終わり、明けて十二月十五日の朝、兼ねて内蔵助から託されていた「十二月九日付の討入り成功報告書」を甚三郎は、瑤泉院付の落合与左衛門まで届けたのである。

それが、

●「委細之様子ハ追而御承知可被成候」

なのである。

甚三郎は、討入りが終わり裏門より四十七士が全員出てきた時は、四十七士にみかんともちを配って義士討入りをねぎらっていた。その後、佐藤條右衛門と共に、米沢町の弥兵衛宅へ向かって一時姿を消す。

しばらくして、泉岳寺に向かうのであるが、泉岳寺門前では「みかん売り」に間違えられている。

その後、泉岳寺門前から、一時期姿を消すことになるが、その時、甚三郎は、三次浅野家下屋敷に向かって、内蔵助より託された十二月九日付の書状を落合に渡したのである。

條右衛門と甚三郎は、義士たちが大名四家にお預けになったのを確認して、米沢町の弥兵衛宅へ再び帰って行った。

この事は「佐藤條右衛門覚書」や泉岳寺の出家が書いた「義士実録」で証明済みである。

以上のように、昼あんどんなどとあだ名を付けられ、余りはっきりしない男としてドラマ・小説・芝居に登場するが、実は、赤穂城明け渡し期より、命を捨てる覚悟をしていたのである。

つまり、内蔵助の気持ちは一藩の最高責任者として、最初から不動のものだったと見るべきだろう。

それが

●「君恥しめらるれば、臣死す」

の教えである。

三百十二年目の現場検証

テレビディレクター　田中慎一（会員）

今年の六月九日、元禄十四年三月十四日に起きた「江戸城内での刃傷事件の検証、ならびに浅野内匠頭の足跡をたどる会」に参加しました。三百十二年前の出来事を、その現場に立ってもう一度見つめ直そうというユニークなこの企画。夏の猛暑を予感させる日差しの強い日にもかかわらず、参加者は約三十名にのぼりました。

―松之廊下跡―

午前十時、会は松之廊下の検証からスタート。皇居東御苑内にある松之廊下跡はご存知のように観光名所になっています。この日も多くの観光客の団体が訪れていました。舗装された道の脇に石碑と並んで案内板（写真1）があり『松之廊下は江戸城内で二番目に長い廊下で、畳敷きの立派なものだった。』と書かれています。L型をした廊下は、全長約五十m、幅は約五mもあったそうです。私は、松之廊下が実際にあったのは石碑の奥、立ち入り禁止になっている辺りだろう思い込んでいました。ところが中島理事長の説明で、私達が今立っている舗装道路（写真2）の下にあったことを知り少し驚きました。

写真1　松之廊下跡の表示

写真2　松之廊下跡

元禄十四年三月十四日、松之廊下の刃傷事件はどのように起きたのか？一部には『吉良上野介と梶川与惣兵衛が話しているところへ、浅野内匠頭が背後から小さ刀で切りかかった。吉良はまず背中を切られ、振り向いたところで額を切られた。』と唱える説があります。これに対し理事長は、数々の史料を照合したうえで明確な状況を提示しています。A図は、「梶川氏筆記」などをもとに作られた事件直前の人物配置図。上部の「櫻之間」を背にするように吉良、それと向かい合うように梶川、その後方に内匠頭が着座して控えています。梶川をはさんでいますが、吉良の視界に入る所に内匠頭はいたのです。したがって『浅野が吉良の背後から切りかかる』という状況はまず考えられません。

そもそも江戸城で吉良を治療した外科医・栗崎道有は次のように証言しています。『吉良上野介は、梶川与惣兵衛と立ち話をしていた時、後ろに座っている高家衆に向かって浅野内匠頭を罵った。それを聞いた浅野内匠頭が怒りのあまり斬りかかり高声をあげたため、吉良上野介は踵を返し、梶川与惣兵衛の方へ向き直った。そのとき振り下ろした浅野内匠頭の刀が吉良上野介の額に入った。』（金瘡部 忠臣蔵第三巻 赤穂市）「背後から切りかかった」説は「吉良が振り向いて背中を向けているところに切りかかった」ことを誤って解しているのかもしれません。しかも一太刀目は「背中」ではなく「額」だったことも、明確に記されています。人の配置図と外科医の証言から炙り出される真実、まさに歴史ロマンを感じずにはいられません。

実際に人を配置しての再現も行いました。私は「梶川与惣兵衛」役を仰せつかりました。松之廊下の南側から縁側を通って畳廊下に入り吉良と

向き合う…。吉良が後ろを振り向き、高家衆に向かって浅野を罵る…。その刹那、浅野が出て切りかかる…。この再現によって、一連の出来事がとてもリアリティをもって感じることができました。

一同はここから内匠頭が移送された経路を史実に沿って歩き、切腹の地、西新橋の旧田村邸を目指します。距離にして約五㎞半の工程です。

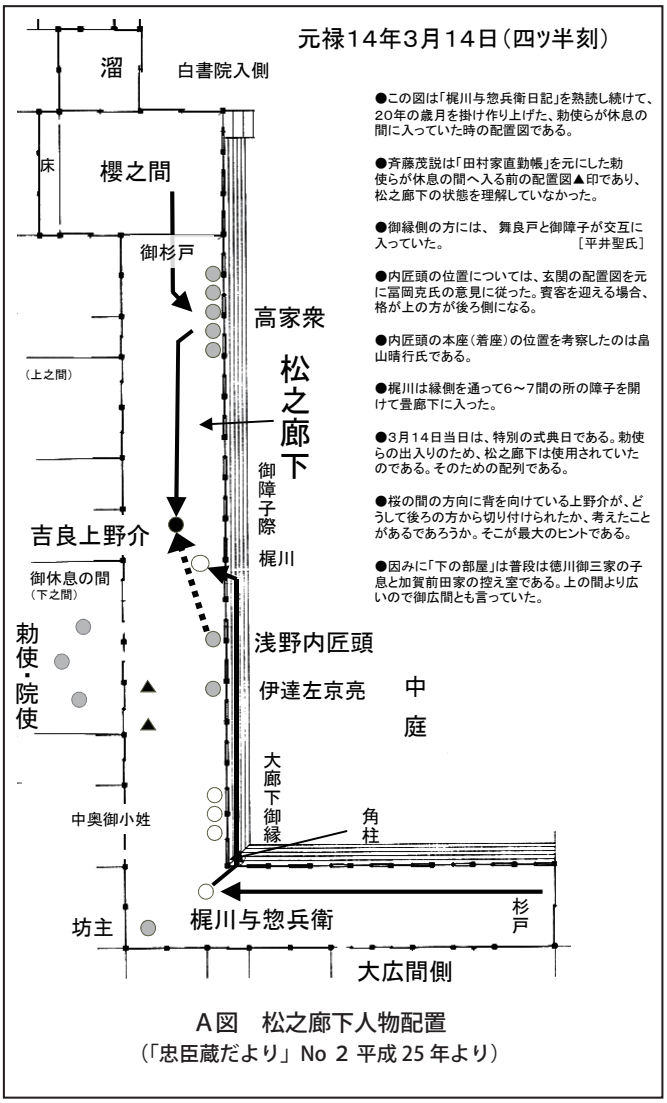
―平川門―

内匠頭は、柳の間でお目付多門伝八郎の取り調べを受けたあと、田村右京太夫の駕籠に乗って城をでます。このとき通ったのが平川門（写真３）。丑寅（北東）の方角、鬼門にあるため不浄の門とされており、城内の罪人や死人はここから出されたと言われています。ところがこの日の説明によると、大奥の関係者をはじめ徳川御三卿も出入りした記録があるとのこと。平川門は不浄の門専用ではなく、普通の門も兼ねていたとみるのが正しいようです。

―和田倉門―

和田倉門の少し手前に「東京銀行協会ビル」（写真４）があります。当時ここは伝奏屋敷、江戸時代の朝廷に対しての迎賓館でした。事件前夜も勅使・院使と従者ら百名近くがここに宿泊していました。内匠頭もここに寝泊りし、彼らの世話をしていたのです。

和田倉門では、下にあるお堀（馬場先濠）が当時「ヤヨスカシ（八代洲河岸）」と呼ばれていたとの説明を受けました。これは徳川家康の通訳をつとめたオランダ人ヤン・ヨーステンの屋敷があったことから名づけられたとのこと。彼の和名「耶楊子（やようす）」が八重洲という地名の由来になったことは、私も何かで読んだことがあります。ここで近くにいた会員の方が一言。『だけど八重洲口は東京駅の反対側だよね。』…確かに、東京駅のこちら側（皇居側）は「丸の内口」、その反対が「八重洲口」です。池袋駅の東口に西武百貨



A図　松之廊下人物配置
（「忠臣蔵だより」No 2 平成25年より）

写真４　旧伝奏屋敷跡

写真３　平川門

店が、西口に東武百貨店があることと重なって、私は思わず笑ってしまいました。

―桜田門―

昼食休憩をはさんで検証再開。日比谷公園から桜田門へ向かいます。桜田門には法務省がありますが、ここは上杉家の上屋敷跡。なんとも因縁を感じる経路です。西新橋にある田村邸を目指すなら日比谷の交差点を曲がらず、新橋方向へ直進した方が近そうです。でも当時その道は入り組んでいたことや隊列が七十名以上に及んだこと、また田村右京太夫が桜田門から登城していたことを考えると、帰邸する際にこのルートが選ばれて当然だったと考えられます。

―愛宕一丁目―

ビルの二階にある近代的なお寺は浅野本家の祈願所「真福寺」。松之廊下事件後、大石内蔵助は真福寺第七世性遍を通じ浅野家の復興を働きかけていました。ここは私が仕事で時々通る場所なのですが、そのお寺であることに全く気づきませんでした。勉強不足です。

―田村家上屋敷跡―

十四時四十分頃、私達は田村家上屋敷跡に到着（写真5）。日比谷通りに面して「浅野内匠頭終焉之地」と書かれた石碑がたっています。実際の田村邸は、日比谷通りから少し奥まったところにあったようです。

この周辺では今、都道の環状二号線を作る大がかりな道路工事が行われています。道路は地下道ですが、田村邸跡の真ん中をぶち抜くように作られます。この工事に伴い「終焉之地」の石碑が一時期撤去されていたそうです。その時の保管場所は東京都第一建設事務所。場所は中央区明石町、聖路加病院のすぐ隣です。聖路加病院といえば浅野家の鉄砲洲上屋敷跡。刃傷事件のあと再び上屋敷に帰ることが出来なかった内匠頭の石碑が、図らずも鉄砲洲に帰ることができたのです。偶然とはいえ不思議な巡り合わせを感じます。

写真５　旧田村邸跡　―浅野内匠頭切腹の碑―

最後に港区生涯学習センターで、休憩をかねた本日の締めくくり。理事長より総括のご説明と、質疑応答が行われました（写真6）。

今回参加して感じたのは、街には今も多くの歴史の形跡があるということ。赤穂事件に由来する場所がたくさんあるにもかかわらず、無意識に通り過ぎていたことを改めて反省した次第です。仕事柄、都内をあちこち移動することが多いので、元禄時代の古地図や中央義士会発行の「忠臣蔵史蹟辞典」を鞄に入れておけば、いつでも元禄にタイムスリップできて楽しいかもしれません。

一方、田村邸跡に道路が通されるなど、開発によって歴史の面影が失われつつあることも肌で感じました。四十九年前の東京五輪では日本橋の上に高速道路を通すなどの乱開発が進められました。二度目の東京五輪が決まった今、再び開発が活性化しつつあります。くれぐれも歴史的財産を大切にした開発に取り組んで欲しいと願うばかりです。

ゆかりの地を訪ねる企画はとても楽しいものです。私が参加したのは「義士引揚げの道を歩く」「大石内蔵助・切腹の地」に続いて三度ですが、いずれも赤穂事件をより身近に感じることができました。次の企画を楽しみにすると同時に、自らもアイデアを練ってみたいと思います。

写真６　総括のご説明と質問の様子

参考文献：忠臣蔵史蹟辞典（東京版）
中央義士会ホームページ

第九回忠臣蔵愛好会

理事　柿崎　輝彦

二月三日（日）、恒例の「赤穂義士の引揚ルートを歩く」を開催した。

例年通り当初は十二月に計画していたが、突然の都議選と日程が重ってしまい、急遽順延を余儀なくされた。そこで、実際の義士引揚日（旧暦の十二月十五日）が、今日（新暦）の一月三十一日にあたり暦的に近いことや四日が義士の祥月命日であることから二月三日となった。

今回のイベントの内容は、事前に「東京新聞」に掲載されたり、直前の一月二十八日に東海大学高輪キャンパスで開催された港区歴史フォーラム「忠臣蔵」で、当会の中島理事長が「よくわかる忠臣蔵」を講演し四百人の席が満席となる大盛況であったこと。さらには忠臣蔵のふるさと赤穂の地元情報紙「赤穂民報」にも取り上げられるなど、遥々兵庫県赤穂からの参加者三名を含む、総勢八十名の忠臣蔵大好き人間が集合場所であるＪＲ両国駅に集った。

当日は天候にも恵まれ、目指す高輪泉岳寺までの約十二キロの行程を、安全面に考慮しつつ、細かな説明が全体に行き渡るようにと、三班に分かれての行軍となった。

義士引揚ルートについては、平成十七年（財）中央義士会発行の「赤穂義士の引揚げ　元禄の凱旋」に詳しく、この書を参考に出来得る限り史実に近いルートを辿った。

港区歴史フォーラムでの中島理事長の講演

現在の東京の街並みや街路は、事件当時と比べすっかり様変わりしてしまったが、赤穂義士が実際に歩いた道や目印が所々に残されている。それは江戸時代から場所が変更していないところで、その代表格が寺社仏閣や屋敷跡である。

具体的には、萬年橋の手前に位置する正木神社付近、最初の休憩地とした松平越前守の中屋敷跡の一画に位置する越前堀児童公園付近、さらには浅野内匠頭邸跡から築地本願寺にかけてと、現在の日本テレビ社屋が立つ旧仙台藩伊達陸奥守上屋敷表門前、金杉橋、札の辻、御田八幡神社あたりがそうである。

逆に、引揚ルートにある橋は、殆どが元の位置から移動している。とくに永代橋に関していえば、現在の位置は元禄時代より約百五十メートルも下流に架っている。

また、泉岳寺の惣門は、当時の東海道（現在の第一京浜国道）に面しており、その前は品川の海に面していた。即ちこのあたりのＪＲ山手線は、元禄時代では海の中に位置することになる。

日の短い季節であったが、何とか明るいうちに泉岳寺まで辿り着けたので、全員に完歩証を手渡した後、近くの旧細川邸内にある史蹟「大石内蔵助等終焉の地」を訪れた。

討入り後の大石内蔵助等十七人が預けられた細川邸跡は、明治以降海軍病院や皇室用地を経て戦後都営アパートが建てられた。

引揚げルートを歩いています

敷地の一画にある切腹の地は、時の当主細川越中守綱利の命により守られ、大正七年東京市（現東京都）指定旧跡となる。その後昭和三十三年に港区教育委員会から、その施設を中央義士会に委嘱されることとなり、当会による造園整備がはじまり昭和三十五年に竣工した。

完成式典は、明治神宮の奉仕により、荘厳なる祭壇を設けるなど、恭しくかつ盛大に行われた。

敷地内には、平らな大きな石が目印として配置され、切腹が行われた位置を、今でも正確に特定することが出来る。

これらについては、平成二十三年当会発行の「大石内蔵助ら切腹の地」に詳しい。

切腹の地での説明
（写真中央の石が切腹位置）

この切腹の地は、通常厳重に門扉が閉ざされ、自由に立ち入ることは出来ないが、前述の経緯から当会が鍵を管理している。そこで今回は参加者全員に入っていただいた。

三百年以上も大切に守られてきた聖地を間近にした一同は皆一様に緊張した面持ちで、とくに冨岡副理事長・荻原常務理事による解説を聞き入る参加者の方々の真剣なまなざしがとても印象的で、切腹当日の義士の振る舞いや立会人の様子など多くの質問が相次ぎ大変好評であった。

再び泉岳寺に戻り一日早い命日の義士墓前で思いおもいに頭を垂れた。

参加者の記念撮影　泉岳寺　１組

参加者の記念撮影　泉岳寺　２組

参加者の記念撮影　泉岳寺　３組

平成二十五年度「平成堀内組」総会（日輪寺評定）

平成堀内組　頭取　宮川政士

毎年の「平成堀内組」総会は、大雨洪水警報の発令中に、開催されておりました。よって、参加している、市長、県議、市議の会員さんはいつでも飛び出せる様、防災服着用でのご参加でした（涙雨というには、程遠く、号泣という言葉が相応しいぐらいでした）。

ところが一転、今年は、本当に涙雨程度で最後まで和気あいあいの中、終了することができました。

又、本年より、三名の新入会員（市議会副議長、剣道協会事務局長、そしてあの『無錫旅情』で有名な尾形大作さん）をお迎えしました。少しずつ少しずつ、山鹿の中でも認識され初めた証かと喜んでいます。

総会では、昨年の事業報告・決算報告、本年度の事業計画・予算案の審議、承認をいただきました。

事業としましては、「赤穂山鹿素行研究会」発行の「わかりやすい山鹿素行のはなし」を市内の小・中・高校と公的な図書室に寄贈しました。内容は山鹿素行の教えを通じて、日常生活でいかに実践するかを、わかりやすく書いてあります。

四月には山鹿ロータリークラブ例会で卓話「赤穂義士と山鹿」を行いました。その翌週、赤穂ロータリー・山鹿ロータリーの友好クラブ締結がなされました。

同様に市博物館講座でも講話をいたしました。

八月二十六日の伝右衛門さんのご命日を繰り上げて二十四日、ご供養の後、義士が細川邸お預けの折り使われた「手水石」を見学に行きました。今では校庭の隅にポツンと置かれ寂しい感じもしました。

お土産に「山鹿素行」の本もお持ちしました。将来、義士の遺髪が眠る日輪寺遺髪塔そばに設置できたら、十七名の方々もどれ程喜ばれることかと思いながら返って来ました。

講話の依頼は生涯大学、更正保護大会、自衛隊幹部候補生学校からも参りました。

本年は、瑤泉院三百回忌にも当たる為、私共の会社で行っております「ともびき塾」（百二十二回毎月一回）で、ご命日にあたる六月三日、「討入りを支えた女性達」を話させていただきました。

「財団法人　中央義士会」発行の本を元にお話をいたしました。

総会当日は会員の奥様の森川栞様作曲、歌・会員森川昭彦氏の「山鹿の堀内伝右衛門」も披露されました。

寂しいニュースは、三百年続いてきた、地元の「堀内組」が解散するという話しが出され、ぜひ続けて欲しいことでもあり、私共でお手伝いさせていただきたいと思います。

「忠臣蔵」の話しだけで終わらず、地元の歴史としてこれからも活動し続けていくつもりです。

創立105年記念

第11回忠臣蔵博士試験問題

［注意事項］

- 試験問題解答を調べるために、お電話等で各施設へ直接問い合わせることはおやめ下さい。
- 同じく、会員同士でも試験のための連絡はおやめ下さい。特に申し上げたいのは、連絡しあっている方は、同じ答えで間違っているのですぐにわかります。
- 問題をよく読んで、一言一言理解した上で、解答して下さい。問題を読み間違えないようにお願い致します。ひっかけ問題がたくさん出題されています。
- 文章での解答については、解答者が理解しているかを判断基準にさせていただきます。
- 文章での解答については、要領を得ない場合は失点とします。
- 解答がないと思われる場合は「なし」とだけ記入して下さい。
- 文章を求める答えで、別紙を添付しても構いません。
- 第１１回忠臣蔵博士試験の解答票は、勉強会などで配布致します。別途必要な方は本部までご連絡下さい。
- **最終提出日は、平成26年10月末日です。**

平成25年12月

第1問	芝の切通しで、頭に浮かぶ四十七士の方はどなたでしょうか。
第2問	丹羽の切り通しとは、どこのお寺の前をいうのでしょうか。
第3問	上野の不忍池にある弁財天（中島）で頭に浮かぶ人はどなたでしょうか。
第4問	坂本龍馬暗殺現場で、頭に浮かぶ四十七士はどなたでしょうか。
第5問	小名木川から水を引き、畑をたがやしていた元禄事件関係者・旗本の名を二人挙げて下さい。
第6問	吉良上野介に対して、松之廊下で被っていた烏帽子を床の間に飾れと忠告した方がいますが、どなたでしょうか。
第7問	近松勘六と近松門左衛門は親戚関係にあると、主張されている方がおりますが、知っていたらお名前を書いて下さい。
第8問	赤穂浅野家がまだ平穏であった頃、大石内蔵助、片岡源五右衛門らが病気にかかっていたカルテが発見されています。その時の赤穂浅野家の主治医はどなたでしょうか。

第9問	「悪口は殺害同然」といった方がおりましたが、どなたでしょうか。
第10問	松之廊下事件で、内匠頭の後役に決まった、戸田忠真の屋敷の上に建っている、現代の建物名を示して下さい。
第11問	菅治左衛門の立場・心情をあなたはどのように理解しますか。端的に答えて下さい。
第12問	「三度の嘆願」とは何のことでしょうか。端的に答えて下さい。
第13問	「旦夕覚書」（たんせきおぼえがき）の筆者はどなたでしょうか。
第14問	元禄事件関係者で亡くなったその場にお墓がある方はどなたでしょうか。
第15問	元禄事件関係者で「佐々十竹」と関係のある方はどなたでしょうか。
第16問	「渋川図書」と聞いて何を思い出しますか。
第17問	「兼春稲荷」と聞いて何処を思い出しますか。
第18問	かつて、泉岳寺内に現在の義士木像とは別に義士木像がありました。どなたの発案で作ることになったのでしょうか。二人おりますが、2名の名を書いて下さい。
第19問	日蓮が入寂した寺と聞いて、何を思い出しますか。
第20問	頼三樹三郎の隣に、元禄事件関係者のお墓がありますが、どなたのお墓でしょうか。
第21問	元禄14年3月14日に起きた、松之廊下事件は、実は柳之間廊下で起きたと主張された学者がおりましたが、どなたでしょうか。
第22問	東京大学史料編纂所に「堀内重勝覚書」（全）という史料がありますが、この史料の内容はどのくらい信用ができる「覚書」でしょうか。下記より選んで下さい。 ①写本なので加筆・脱字が多く、余り信用できない。 ②水野定吉の「覚書」と全く同じ内容で信用できる。 ③赤穂義臣対話の方が信用できる。 ④表題名（勝重）から間違っているので信用できない。

第23問	「赤穂」という地名は、全国を調べると下記のどれでしょうか。 ①兵庫県赤穂市にしかない。 ②赤穂という地名は、5ヶ所ある。 ③長野県の赤穂と2ヶ所のみである。 ④「あこう」や「あかほ」など読み方が関係なければ17ヶ所ある。
第24問	元禄14年3月14日は御返答日であったのですが、松之廊下事件があった時、勅使らが既に江戸城へ入っていた事を証明する史料を一つ挙げて下さい。
第25問	鶴見に「総持寺」という曹洞宗の本山を名乗っている大寺院がありますが、そこに元禄事件関係者の遺物があります。何があるのでしょうか。
第26問	川崎平間村の大石内蔵助の宿舎を建てた大工さんは、渡辺喜右衛門といいます。この大工さんはどのような地位の大工さんでしたでしょうか。棟梁では答えになりません。
第27問	世田谷の豪徳寺と高輪の泉岳寺と共通することはなんでしょうか。
第28問	伊勢神宮といえば、元禄15年4月11日に大石内蔵助が参詣したことは周知のことですが、この時期にもう一人四十七士の中で参詣した人がおります。どなたでしょうか。
第29問	断定はできませんが、赤穂義士の引揚げは、一時、新大橋と永代橋の二手に分かれて泉岳寺に向かった可能性があります。それを示す史料を指摘して下さい。
第30問	赤穂義士の引揚げ途中、三田辺で姿を見せたのが高田郡兵衛ですが、もう一人姿をみせた赤穂の旧臣がおります。どなたでしょうか。

注意：・文章での解答が多いので、月一勉強会、水曜ゼミなどでなるべく解説をして参ります。勉強会の出席を第一と考えて頑張って下さい。
・解答が的確でない場合、△印が付く場合がございます。△が2つで1点減点となります。
・問題そのものについてのご質問は幾つでも受付けますので、何度でも聞いて下さい。

中央義士会　業務報告

年 月 日	項　　目	内　　容
H24.12.15	吉良邸　討入り真相の説明	両国吉良邸跡　中島理事長他
H25.1.13	第48回月一勉強会	新橋　港区生涯学習センター　304学習室
2.3	第9回愛好会　赤穂義士の引揚げルートを歩く	両国～泉岳寺　冨岡副理事長、荻原常務理事、柿崎評議員
3.1	第49回月一勉強会　新発田武庸会100周年の報告、寺坂筆記続き	新橋　港区生涯学習センター　304学習室
4.25	第50回月一勉強会義士本について中央義士会の見解、寺坂筆記続き	新橋　港区生涯学習センター　304学習室
5.12	第51回月一勉強会　元禄事件の総合ディレクター天野弥五右衛門について、武庸筆記	新橋　港区生涯学習センター　304学習室
5.26	理事会・評議委員会	新橋　港区生涯学習センター　205学習室
6.9	第10回愛好会　江戸城松之廊下検証、浅野内匠頭の足跡を辿る	江戸城～新橋　中島理事長
6.19	第15回水曜ゼミ　寺坂吉右衛門は本当に逃亡したのか	新橋　港区生涯学習センター　304学習室
7.7	第52回月一勉強会　そろそろ寺坂離脱説の結論に向かうか、武庸筆記続き	新橋　港区生涯学習センター　304学習室
8.4	第53回月一勉強会　五代将軍綱吉時代の改易減知について、武庸筆記続き	新橋　港区生涯学習センター　304学習室
9.15	第54回月一勉強会　八木康夫のやさしい古文書教室、武庸筆記続き	新橋　港区生涯学習センター　304学習室
10.6	第55回月一勉強会　佐藤條右衛門は討入りをどう見たのか、武庸筆記続き	新橋　港区生涯学習センター　304学習室
10.27	理事会・評議委員会	新橋　港区生涯学習センター　205学習室
10.30	佐藤條右衛門覚書　本　刊行	中島理事長
11.10	第56回月一勉強会　大石内蔵助元禄15年11月29日の書状	新橋　港区生涯学習センター　304学習室
11.22	泉岳寺新書院　上棟式出席	冨岡副理事長、渡辺会員
11.24	第1回古文書の回　大石内蔵助元禄15年11月29日の書状	新橋　港区生涯学習センター　304学習室
12.13	消防会館義士追悼祭	中島理事長
12.14	泉岳寺法要	冨岡副理事長
12.14	赤穂義士討入り311年追憶の集い	泉岳寺
12.14,15	両国・元禄市（義士祭）	中島理事長　他

（財）中央義士会
金子堅一
東京都荒川区在住

播州赤穂
忠臣蔵問屋わたや
店主　矢野英樹
赤穂城隅櫓北隣
0791（42）1151

（財）中央義士会
副理事長
冨岡克
東京都中央区在住

（株）オフィス　ベラ
医療コンサルタント　訪問看護
訪問リハビリテーション
代表取締役
武類俊哉
東京都北区在住

（財）中央義士会
評議員
勝田芳造
家紋「蛇の目」
〒一三一―〇〇四三
東京都墨田区立花四―三七―一八
電話　〇三―三六一一―三三一七

（財）中央義士会
監事
塚原裕子
〒一四四―〇〇一五
東京都大田区蒲田一―六―一八―一四一四

（財）中央義士会
常務理事
荻原栄
中央義士会のホームページは　http://www.12-14.jp/　です

（財）中央義士会
特別顧問
渡邉寛
浦安市富岡三―三　A―一〇〇六

（財）中央義士会
評議員
上原益雄
東京都練馬区在住

法耀山　高光寺
赤穂市加里屋一八六一

真実の「忠臣蔵」「赤穂事件」の探求の勉強はいつするの！
今でしょう！

有限会社　吉田商店
代表取締役　吉田泰仁
函館市古川町９１番１２（〒041-0262）
TEL /FAX (0138)58-3710
携帯　090-8899-5171
めしの種 / 清涼飲料水卸業
イベント・催事業
血液型　o型　星座　/ おとめ座
Birthday / 9月15日
趣味 / 阪神タイガースを心から愛する事
忠臣蔵（赤穂義士）の研究
幕末維新の研究
口称 / 寅さん　FAMILY/ 嫁（定子）1人
ラッキー（パピコン）1匹
POST/（財）中央義士会評議員　忠臣蔵博士
函館愛虎会幹事長
北海道街商共同組合理事

（財）中央義士会
理事
高城和夫
東京都西国分寺在住

（財）中央義士会
理事
柿崎輝彦
横浜市港北区在住

式典・講演会・試写会・など多目的に
ニッショーホール
（日本消防会館）
貸し会議室あり（大小4室）・地下飲食店7店舗
東京都虎ノ門二丁目九番十六号
Tel〇三―三五〇三―一四八六

告知

平成二十五年九月二日の越谷竜巻の際には全国の多くの関係者からお見舞のご連絡を受け、心より御礼申し上げます。
隣家までは被害を受けましたが、幸い、中央義士会分室は無事でございました。
御心掛けに感謝申し上げます。

中島康夫

★新入会員紹介★（敬称略）

地区	会員別	芳名
港区	一般	一噌庸二
港区	一般	大友明子
品川区	一般	木下　哲
品川区	一般	木下　猛
練馬区	一般	田戸清弘
千代田区	一般	田中太郎
品川区	一般	手塚　瞳
鎌ヶ谷市	一般	長井寛三
札幌市	一般	橋本　到
渋谷区	一般	平野智恵子
我孫子市	一般	八木康夫
宇都宮市	一般	渡邉敏雄

忠臣蔵郵便局できる

この度、赤穂市の赤穂城近くにある「赤穂加里屋郵便局」が「赤穂忠臣蔵郵便局」に名称を変更いたしました。
日本で唯一の忠臣蔵郵便局です。十二月九日には、オープニングセレモニーが華やかに行われました。

「大石頼母助の系譜」販売中

浅野家の始まりから、浅野家に仕えた大石家、さらに、笠間浅野家と笠間出身の赤穂義士、また、幕末に活躍した、浅野梅堂まで書かれた本はこれ一冊です。
ご注文は、郵便振込で　NPO法人忠臣蔵倶楽部
〇〇一九〇―〇―三四六〇三八へ。「大石頼母助の系譜」とお書き下さい。一冊　千円＋送料八十円です。

編集後記

一

思った通りであった。江戸検の忠臣蔵問題は必ずボロを出すと思っていた。
今回の試験問題の出し方を拝見して、この問題に携わった先生たちの知能を疑う。
こんな先生が教授の名において、大学で生徒に何を教えるのかと思うとゾッとする。
これすべて、今の教育方針に問題がある。史学の先生は、どんなに大きな間違いを起こしても差ほど問題にならないし、大きな実害もない。
替えてこれが医学ならどうだろう。東大の先生を差し置いて日大（現順天堂大）の先生が天皇の手術を行う。生命が関わると実力が問われるのである。
史学には、これ程の緊迫感がないのである。それどころか、いろいろな考えがあると片付けられてしまう。吉良名君説などが、その最たる虚説である。名君の証拠など一つもある訳ではない、町が言ったからと、名君と決めてしまう。とかく、史学界とは、この程度の人間しか居ないのが現状である。それに、試験問題をたのむのはちょっと待てよ。
忠臣蔵以外の問題も危ないもんだ。

編集者　中島康夫（企画・編集・検証）
荻原　栄（編集）
冨岡　克（校正）
㈱正大印刷社（印刷）